

第三部 第六篇 超過利潤の地代への転化 第三十七章 緒論

◇「第六篇 超過利潤の地代への転化」の編集について。

「地代に関する篇(第六篇、第三十七章～第四十七章——青山)は、ずっと完全に書き上げられていたとはいえ、けっしてよく整理されてはいなかった。「いちばん手がかかったのは、差額地代Ⅱのところの表であり、また、第四三章ではそこで取り扱われるべき」差額地代Ⅱの第三の場合が全然検討されていないということを見つけたことだった。」

「第三十七章」の抜粋

研究の範囲と研究の前提

「土地所有をそのさまざまな歴史的形態において分析することは、この著書の限界の外にある。われわれが土地所有を取り扱うのは、ただ、資本によって生みだされた剰余価値の一部分が土地所有者のものになるかぎりでのことである。だから、われわれは、農業が製造工業とまったく同様に資本主義的生産様式によって支配されているということを前提する。すなわち、農業が資本家によって営まれており、この資本家を他の資本家から区別するものは、さしあたりは、ただ、彼らの資本とこの資本によって動かされている賃労働とが投下されている要素だけだということを前提する。」(『資本論』第3巻 第2分冊 大月版 ⑤ P793)

「資本主義的生産様式一般が労働者からの労働条件の収奪を前提するとすれば、この生産様式は農業では農村労働者からの土地の収奪と、利潤のために農業を営む資本家への農村労働者の従属とを前提する。」(P794) ※これは、日本の現状に合っていない。

「われわれが問題にするのは、資本主義的生産が発展している国の農業地代である。」(P808)

土地所有の独占の歴史性

「この観念——自由な私的土地所有という法律的観念——は、古代世界ではただ有機的な社会秩序の解体の時代のみにも現われ、また近代世界ではただ資本主義的生産の発展につれてのみ現われる。……土地所有の独占は資本主義的生産様式の歴史的前提であって、それは、なんらかの形で民衆の搾取にもとづいているすべての以前の生産様式の永続的な基礎であるように、資本主義的生産様式にとってもやはりその永続的な基礎である。しかし、資本主義的生産様式が始まろうとするときにそれが当面する土地所有の形態は、この生産様式に対応してはいない。それに対応する形態は、資本への農業の従属によってこの生産様式自身によってはじめて作りだされるのである。」(P795)

資本主義的生産における農業の否定的側面

「ジョンストンやコントなどは、所有と合理的農学との矛盾に当面してただ一国の土地を一つの全体として耕作する必要を眼中においているだけである。しかし、特殊な土地生産物の栽培が市場価格の変動に左右されるということ、また、この価格変動につれてこの栽培が絶えず変化するという、そして資本主義的生産の全精神が直接眼前の金もうけに向けられているということ、このようなことは、互いにつながっている何代もの人間の恒常的な生活条件の全体をまかなわなければならない農業とは矛盾している。その適切な一例は森林であって、森林は、ただ、それが私的所有ではなくて国家管理のもとにおかれて

いる場合にだけいくらかは全体の利益に適合するように管理されることもあるのである。」
(P798 本文中の注27)

資本主義的生産様式の大きな功績

「一方では農業の合理化がはじめて農業の社会的経営を可能にしたということ、他方では土地所有の不合理的を示したということ、これは資本主義的生産様式の大きな功績である。」
(P796)「といっても、われわれがあとで見ると、土地所有は、ある発展段階に達すれば資本主義的生産様式の立場から見てさえも余計な有害なものとして現れるということによって、他の種類の所有とは区別されるのであるが。」 (P804)

地代の資本還元

「地代は、土地所有者が地球の一断片の賃貸によって毎年受け取る一定の貨幣額で表される。すでに見たように、一定の貨幣収入はすべて資本還元されることができる。……しかし、このような地代の資本還元は地代を前提としているのであって、地代を逆にそれ自身の資本還元から導き出したり説明したりすることはできないのである。」 (P804 ~ 805)

※マルクスは、地代の資本還元によって、地代を「土地の買い手にとってとる利子形態と混同する」ことの誤りを指摘しているが、資本主義的生産様式のルールは「一定の貨幣収入はすべて資本還元」することなので、バブルとか恐慌のような異常事態でないときは、資本主義的生産様式の社会では資本還元された地代が「土地価格」の一つの指標となる。

「地代」研究に当たっての留意点

「地代——すなわち資本主義的生産様式の基礎の上での土地所有の独立な独自の経済的形態——の科学的な分析のためには、地代を不純にしおおい隠すいっさいの混合物を取り去って地代を純粋に考察することが重要であるが、同様に、他方では、土地所有の実際上の諸効果を理解するためには、また、地代の概念や性質とは矛盾していながらも地代の存在様式として現れる多くの事実を理論的に認識するためにも、このような理論の混濁の源泉になる諸要素を知っておくことが重要なのである。」 (P806)

「地代」の分析を不明瞭にする、おもな三つの誤り

- ①社会的生産過程のいろいろな発展段階に対応するいろいろな地代形態の混同。
- ②「すべての地代は剰余価値であり、剰余労働の生産物である」が、その根拠を「剰余価値および利潤一般の一般的な存在条件」に求めるのは誤りである。「一般的な存在条件」は、「剰余価値および利潤」そのものの「条件」であるが、「資本主義的生産様式に対応する」「利潤とか地代とかいう特定の形態とはなんの関係もないのである。」 (P821)

※「地代」が「土地」を通じて生じる「超過利潤」であることを言っていると思われるが、残念ながら、私には文章の後半部分の内容を明瞭に掴むことができませんでした。

- ③「資本主義的生産の基礎の上では、どの生産部門にも、またそれらのどの生産物にも共通なことが、とかく地代の(また農業生産物一般の)特性だと考えられがちなのである。」 (P822)

農業人口の相対的減少は資本主義的生産様式の本性に根ざしている

「農業人口を非農業人口に比べて絶えず減らして行くということは、資本主義的生産様式の本性に根ざしていることである。なぜならば、工業(狭義の Industrie)では可変資本に比べての不変資本の増大は、可変資本が相対的には減少しても絶対的には増大するということに結びついているが、他方、農業では、一定の地片を利用するために必要な可変資本は

絶対的に減少して行き、したがって、可変資本が増大できるのはただ新たな土地が耕作されるかぎりでのことであるが、このことはまた非農業人口のいっそう大きな増加を前提するのである。」(P822)

地代の特有な性質

「それ(地代——青山)に特有なことは、農業生産物が価値(商品)として発展するための諸条件とともに、また農業生産物が価値の実現の諸条件とともに、土地所有が自分の関与なしにつくりだされたこの価値のうちのますます増大する一部分を取得する力もまた発展し、剰余価値のうちのますます増大する一部分が地代に転化するということなのである。」(P825)

「第三七章」の概略

研究の範囲と土地所有の独占の歴史性

「われわれが問題にするのは、資本主義的生産が発展している国の農業地代である。」(P808)

自由な私的土地所有という「法律的観念は、古代世界ではただ有機的な社会秩序の解体の時代のみに見われ、また近代世界ではただ資本主義的生産の発展につれてのみ現われる。……土地所有の独占は資本主義的生産様式の歴史的前提であって、それは、なんらかの形で民衆の搾取にもとづいているすべての以前の生産様式の永続的な基礎であるように、資本主義的生産様式にとってもやはりその永続的な基礎である。」(P795)

資本主義的生産における農業の否定的側面

資本主義的生産の全精神が直接眼前の金もうけに向けられているということ、このことは、互いにつながっている何代もの人間の恒常的な生活条件の全体をまかなわなければならない農業とは矛盾している。その適切な一例は森林であって、森林は、ただ、それが私的所有ではなくて国家管理のもとにおかれている場合にだけ、いくらかは全体の利益に適合するように管理されることもあるのである。

資本主義的生産様式の大きな功績

「一方では農業の合理化がはじめて農業の社会的経営を可能にしたということ、他方では土地所有の不合理を示したということ、これは資本主義的生産様式の大きな功績である。」(P796)

地代の資本還元と「地代」研究に当たっての留意点

「地代は、土地所有者が地球の一断片の賃貸によって毎年受け取る一定の貨幣額で表される。すでに見たように、一定の貨幣収入はすべて資本還元されることができる。」(P804)

地代の科学的な分析のためには、「地代を不純にしおおい隠すいっさいの混合物を取り去って地代を純粋に考察することが重要であり、「他方では、土地所有の実際上の諸効果を理解するためには、また、地代の概念や性質とは矛盾していながらも地代の存在様式として現れる多くの事実を理論的に認識するためにも、このような理論の混濁の源泉になる諸要素(地代の資本還元など——青山)を知っておくことが重要なのである。」(P806)

※マルクスは、地代の資本還元によって、地代を「土地の買い手にとってとる利子形態と混同する」ことの誤りを指摘しているが、資本主義的生産様式のルールは「一定の貨幣収入はすべて資本還元」することなので、バブルとか恐慌のような異常事態でないときは、

資本主義的生産様式の社会では資本還元された地代が「土地価格」の一つの指標となる。

「地代」の分析を不明瞭にする三つの誤り

「地代」の分析を不明瞭にする三つの誤りをあげ、注意喚起している。

農業人口の相対的減少は資本主義的生産様式の本性に根ざしている

「なぜならば、工業(狭義の Industrie)では可変資本に比べての不変資本の増大は、可変資本が相対的には減少しても絶対的には増大するという事に結びついているが、他方、農業では、一定の地片を利用するために必要な可変資本は絶対的に減少して行き、したがって、可変資本が増大できるのはただ新たな土地が耕作されるかぎりでのことであるが、このことはまた非農業人口のいっそう大きな増加を前提するのである。」

地代の特有な性質

「農業生産物が価値(商品)として発展するための諸条件とともに、また農業生産物が価値の実現の諸条件とともに、土地所有が自分の関与なしにつくりだされたこの価値のうちのみますます増大する一部分を取得する力もまた発展し、剰余価値のうちのみますます増大する一部分が地代に転化するということなのである」(P825)と述べています。

「第三章」の要約

この「章」は、「緒論」として、研究課題が「資本主義的生産が発展している国の農業地代である」(P808)こと、「土地所有の独占は資本主義的生産様式の歴史的前提であって、それは、なんらかの形で民衆の搾取にもとづいているすべての以前の生産様式の永続的な基礎であるように、資本主義的生産様式にとってもやはりその永続的な基礎である」(P795)ことを述べ、資本主義的生産の全精神が直接眼前の金もうけに向けられているということからくる資本主義的生産における農業の否定的側面を述べるとともに、「資本主義的生産様式の大きな功績」として「一方では農業の合理化がはじめて農業の社会的経営を可能にしたということ、他方では土地所有の不合理的を示したということ」(P796)を述べています。

そしてマルクスは、地代が「土地所有者が地球の一断片の賃貸によって毎年受け取る一定の貨幣額で表され」、「一定の貨幣収入はすべて資本還元されることができる」(P804)ことを述べ、地代の科学的な分析のためには、「地代を不純にしおおい隠すいっさいの混合物を取り去って地代を純粋に考察すること」とともに、「土地所有の実際上の諸効果を理解するためには、また、地代概念や性質とは矛盾していながらも地代の存在様式として現れる多くの事実を理論的に認識するためにも、このような理論の混濁の源泉になる諸要素(地代の資本還元など——青山)を知っておくことが重要」(P806)であることを指摘します。

※マルクスは、地代の資本還元によって、地代を「土地の買い手にとっての利子形態と混同する」ことの誤りを指摘していますが、資本主義的生産様式のルールは「一定の貨幣収入はすべて資本還元」することなので、バブルとか恐慌のような異常事態でないときは、資本主義的生産様式の社会では資本還元された地代が「土地価格」の一つの指標となります。

最後に、「地代」の分析を不明瞭にする三つの誤りをあげ、農業人口の相対的減少は資本主義的生産様式の本性に根ざしていることを述べ、地代に特有なこととして、資本主義的生産様式の発展とともに、「土地所有が自分の関与なしにつくりだされたこの価値のう

ちのますます増大する一部分を取得する力もまた発展し、剰余価値のうちのますます増大する一部分が地代に転化する」(P825)を言います。

「第三七章」のポイントと現代の私たちが留意すべき点

「第三七章」のポイント

この「章」は、「地代」論の「緒論」として、以降の研究課題が「資本主義的生産が発展している国の農業地代である」(P808)こと、「土地所有の独占は資本主義的生産様式の歴史的前提であり、「その永続的な基礎である」(P795)ことを述べ、資本主義的生産の全精神が直接眼前の金もうけに向けられているということから、資本主義的生産における農業の否定的側面を述べるとともに、「資本主義的生産様式の大きな功績」として「一方では農業の合理化がはじめて農業の社会的経営を可能にしたということ、他方では土地所有の不合理を示したということ」(P796)を述べています。

そしてマルクスは、地代が「土地所有者が地球の一断片の賃貸によって毎年受け取る一定の貨幣額で表され」、「一定の貨幣収入はすべて資本還元されることができる」(P804)ことを述べたあと、地代の科学的な分析のためには、「地代を不純にしおおい隠すいっさいの混合物を取り去って地代を純粋に考察する」と同時に、「土地所有の実際上の諸効果を理解するためには、また、地代概念や性質とは矛盾していながらしかも地代の存在様式として現れる多くの事実を理論的に認識するためにも、」地代の「理論の混濁の源泉になる諸要素(地代の資本還元など——青山)を知っておくことが重要」(P806)であることを指摘します。

最後に、「地代」の分析を不明瞭にする三つの誤りをあげ、農業人口の相対的減少は資本主義的生産様式の本性に根ざしていることを述べ、地代に特有なこととして、資本主義的生産様式の発展とともに、「土地所有が自分の関与なしにつくりだされたこの価値のうちのますます増大する一部分を取得する力もまた発展し、剰余価値のうちのますます増大する一部分が地代に転化する」(P825)を言います。

現代の私たちの課題

私たちは、「地代」論の学習を通じて、「地球の一断片」を資本主義的生産様式のもとで所有することの経済的意味を理解するとともに、資本主義的生産様式のもとでの「土地所有の不合理」についての現代の現れをより深く論究する契機とする必要があります。

なお、マルクスは、地代の資本還元によって、地代を「土地の買い手にとってとる利子形態と混同する」ことの誤りを指摘していますが、資本主義的生産様式のルールは「一定の貨幣収入はすべて資本還元」することなので、バブルとか恐慌のような異常事態でないときは、資本主義的生産様式の社会では資本還元された地代が「土地価格」の一つの指標となります。